さんまとパンダ
―「現代日本紀」考証二題―

久　禮　旦　雄

令和二年（二〇二〇）年一月十三日に開催された、京都産業大学日本文化研究所によるシンポジウム「『日本書紀』の成立と記事の虚実」にコメンテーターとして登壇して以来、『日本書紀』に関する取材を受けることが増えた。その過程で調べ直したものの中には興味深い内容も含まれているので、ここに調査メモの一部をまとめておきたい。

一、イザナミノミコトとさんま寿司

令和三年（二〇二一）十月、某報道番組からの取材で、質問は「和歌山県で食べられているさんま寿司について『日本書紀』に記されているのは本当か」というものであった。折からのさんま不漁のニュースにからめて、日本人の食生活にさんまが深く関わっていることを示すものとして紹介したい意図があるように思われた。

しかし、例えば『古事類苑』「動物部」にある「サンマ」の項目に近世以前の史料が掲載されていないことを考えると、それほど古く遡るものか疑問に感じられた。

改めて確認すると、例えば『日本経済新聞』平成三十年（二〇一八）二月二十二日夕刊に掲載された「（食紀行）三重のサンマずし――お祝いで食す家庭の味」という記事には、

「熊野灘をのぞむ三重県南部や和歌山県で古くから庶民の味として親しまれてきたサンマずし。正月などハレの日に欠かせない家庭料理として代々受け継がれてきた。なかでも熊野のサンマずしの歴史は古く、三重県熊野市は「サンマずし発祥の地」をうたう。

1月10日、熊野市の産田（うぶた）神社で安産や子供の健康などを祈願する例大祭が開かれた。同神社はイザナミノミコトが火の神を産んだ場所と伝えられる。骨が丈夫で元気に育つようにと、子供たちが骨の付いたままのサンマずしを食べるのが習わしだ。

「日本書紀」に、産田神社の祭礼で「サンマずし」が振る舞われていたとの記述があることから、同神社は「サンマずし発祥の地」といわれる。それを根拠に「熊野のサンマずしは日本最古」とPRしようと、市内のサンマずし製造・販売業者が２００４年に「熊野市さんま寿し保存会」を設立。1月10日を「さんま寿しの日」として宣言した。」

とあり、さんま寿司の説明とともに、『日本書紀』への言及がある。それ以前の記事として、『毎日新聞』の地方版（愛知県）平成二十六年（二〇一四）十月五日掲載の「再発見！東海あんな味こんな味　さんま寿司（三重県）」には、同様の由来が地元で語られていたという記述が見える。

日経新聞・毎日新聞ともに熊野市の産田神社の祭礼においてサンマ寿司が振る舞われていたことが『日本書紀』に見えるとする。岡野節子・堀田千津子「紀伊地域における〝さんまずし〟」によれば、「……産田神社は女神の伊弉冊尊が火の神の軻遇突智神を出産し、崩御された地であると「日本書紀」に記されている。

祭神は安産や子供の成長にご利益があると言われ、祭日になると遠方からの参詣者も多い。1月10日の大例祭と11月23日の新嘗祭の年2回に神事が行われ、この時「奉飯（ほうはん）」の直会と称して饗応がある。この神事とは1杯の「汁かけ飯」、1本の「骨つきさんまの姿ずし」、「御神酒」、「赤和え」の献立である……「骨つきさんまの姿ずし」とは郷土料理の「さんまの姿ずし」とは異なり、神事に関与している。さんまを骨つきのまま腹開きにしてあるので、この神社の祭事しか食することができない。……」という。[1]

イザナミノミコト（『日本書紀』は伊弉冉尊、『古事記』では伊邪那美神もしくは伊邪那美命）は、記紀神話において、イザナギノミコト（『日本書紀』では伊弉諾尊、『古事記』では伊邪那岐命）と夫婦となり、国土と神々を産んだが、『古事記』ではその際に火神であるホノカグツチを出産し、黄泉国に赴いたとされている。産田神社はこのイザナミノミコトがホノカグツチを出産し、死去したところとされており、そこでの特殊な神饌がさんま寿司なのである。

『日本書紀』はイザナミノミコトの死について「一書に曰く、伊弉冉尊、火神を生み給ふ時に灼かれて神退去ましぬ。故れ紀伊国熊野の有馬村に葬しまつる。土俗、此神の魂を祭るに、花の時に花を以て祭る。又鼓・吹幡旗を用て歌い舞い祭る」と記しており、これは現在「花の窟」（花窟神社）と称される場所（神社）に比定されている。産田神社はその近くに位置しているが、その神社についての記述は『日本書紀』にはない。当然のことながら「さんま寿司」の記述も『日本書紀』にはない。

江戸時代に紀州藩が編纂した『紀伊国続風土記』には「奥有馬村」の「産土神社」についての記述として、「口・奥有馬・山崎三か村の産土神なり、土人伝へいふ、伊弉冊尊此地にて軻遇突知神を産み給ふ故に産田と名つくといふ。……上古は榎本氏代々神官にて社領の地を掌りしに、中世以来別に神主を置き神事を掌らしむ

……天正の頃榎本氏断絶し、宮社も尽兵火に罹りて古記等伝はらさる事惜むへし。……又寛文年中花ノ窟ともに殺生禁札を給へり」とあり、江戸時代にはイザナミノミコトの出産の場所という伝承が確認できる。[2] 同社には祭祀遺構が存在し、弥生時代のものとされる遺物も出土している（熊野市指定文化財）ことから、古代においてなんらかの祭祀が行われ、その由来となる伝承も存在していた可能性がある。[3]

しかし、『続風土記』の記述によれば「天正の頃」（一五七三～一五九二＝安土桃山時代）に神官の榎本氏が断絶し、社殿も焼亡したため古い記録などは存在しないという。つまり『日本書紀』に採用されなかった伝承が現地に残っていたとも考えにくい。

なお昭和十三年（一九三八）に三重県神職会によりまとめられた『三重県下の特殊神事』には産田神社の神事として「ほう飯」が記載されているが、そこでは「骨付鮒」が供されることになっており、その由来は「不詳」で、「小児の左箸（左手に箸を持ちて食事するもの）を匡正するに霊験ありとて遠方より来りてほう飯を請ふもの少なからず」とされている。[4] この段階で、特にイザナミノミコトとの関係などが記録されていないことは注目される。

以上、まとめておくと、産田神社をイザナミノミコトが火神を産んだ場所とする記事は江戸時代の『紀伊続風土記』には確認できるが、『日本書紀』までさかのぼるものとは考えにくい。さんま寿司の記事についても同様である。おそらくは産田神社とイザナミノミコトとの関係が語られるようになった後に、イザナミノミコトと同様に『日本書紀』に記事があるという説が（おそらく近代以降に）生み出されたものと思われる。

以上の概略を依頼のあった報道番組に提供した。情報提供に感謝する電話をいただいたが、その後、番組内容には反映されなかった（さんま寿司と『日本書紀』の関係についての言及はなかった）ようである。

二、則天武后とパンダ

令和四年（二〇二二）の二月、時事通信社よりの取材で、「『日本書紀』に則天武后が日本にパンダを送ったという記事があるというのは本当か」というものがあった。

この質問は、日中国交正常化五十周年に関連して、「上野動物園のジャイアントパンダ情報サイト　UENO-PANDA.JP」の「ジャイアントパンダについて」という記事に「海外に渡ったジャイアントパンダとしては、唐（618年～907年）の女帝である則天武后が「685年につがいのパンダ2頭と毛皮70枚を贈っており、日本書紀にも記されている」という説があります」とあることの根拠を問うものであった。[5]

もっとも、このサイト自体が該当する『日本書紀』の記事からはパンダとはわからないとしており、同じ上野動物園の発行するメールマガジン「ズー・エクスプレス」№125（2003年8月）では、読者から「（中国の）成都パンダ繁殖基地のスタッフから、遣唐使の時代に中国からジャイアントパンダが贈られた」と聞いたが「この件について、文献など手がかりがあるのでしょうか」との問い合わせに対して、ラモナ・モリス&デスモンド・モリス『パンダ』と、同書が引用したヴェント『世界動物発見史』に該当する記事があるが、根拠は不明と回答している。[6]

実際、中国の四川省成都大熊猫繁育研究基地のパンフレットには則天武后が日本にパンダを送ったという記事があるようで、中国・韓国の新聞やそれを根拠としたインターネット上の記事などで繰り返し言及され、批判もされている。[7]

また、家永真幸『中国パンダ外交史』には「巷のパンダ関連本や博物館の展示はしばしば「パンダは唐の

時代に日本に贈られた」と説明している。……しかしこの説は残念ながら歴史学的に証明されているわけではない」としてヴェントの記述を紹介し、「現在のヒグマと解釈するのが妥当」としている。[8]

さて、上野動物園「ズー・エクスプレス」が則天武后による日本へのパンダ贈与説の根拠としたヘルベルト・ヴェント『世界動物発見史』の該当記事は以下のようなものである。

「……古代中国文学に登場する動物の中で並ぶもののない立役者は（実在することがわかったのだが）「白熊（パイシオン）」である。雲南省の山地の竹藪にいる白熊は、唐の初代皇帝の治世、六二一年に書かれた年代記にすでに載っている。この後の日本の皇室年代記によると、六八五年一〇月二十二日、中国の皇帝が日本の天皇に生きている白熊二頭と白クマの皮七十枚を贈ったという。……」

ヴェントはその後、この「白熊」が長くホッキョクグマと理解されていたが、十九世紀に入り、宣教師であり博物学者のアルマン・ダヴィドが四川省でジャイアントパンダ（いわゆるパンダ）を発見したことにより、中国でいうところの「中央アジア産で」「古代の年代記に……白い毛皮に黒い模様がある」と記される「白熊」がホッキョクグマとは違う別の動物のことだと判明したという経緯を書いている。[9]

ここでヴェントが引用している記事がいかなる史料に基づくかは明確ではない。[10]既に指摘されていることだが、六八五年は日本では天武天皇十四年に相当し、この時は白村江の敗戦以来、日唐の正式な交流はない状態であった。当然のことながら、広く流通している則天武后のパンダ贈与という記事は『日本書紀』に確認することはできない。これはおそらくヴェントのいう「日本の皇室年代記」を『日本書紀』と理解して主張されたものである。

『日本書紀』において、則天武后パンダ贈与説と時期的にも内容的にも近いものと思われるのが、これも既

に指摘があるが『日本書紀』斉明天皇四年（六五八）是歳条の「越国守阿倍引田臣比羅夫、粛慎を討ち、生羆二、羆皮七十枚を献ず」という記事である。[11] ここでの「粛慎（みちはせ）」は長く本州北部で律令国家の支配に服さない民を指すとされてきたが、近年では北海道の人々のことを意味するという説が有力である。[12] また、同じ『日本書紀』の翌年七月庚寅条には「高麗の使人、羆皮一枚を持ちて其價を稱して曰く、綿六十斤と。市司、咲ひて避けて去る。高麗畫師子麻呂、同姓賓を私家に設く日、官の羆皮七十枚を借りて爲賓席と為す。客等羞ぢ怪しみて退く」とあり、高麗、すなわち中国東北地方から朝鮮半島北部を支配していた高句麗の使者が「羆皮」を高値で売りつけようとしたのに対して、朝廷が持っていた（おそらく比羅夫が献上した）七十枚の「羆皮」を見せて驚かせたという記事が見える。このことからも、ここでの「羆」は現在の北海道にいるヒグマのことと理解して問題はない。

そして同年、日本は唐に使者を派遣しており（白雉の遣唐使）、『日本書紀』斉明天皇五年七月戊寅条には「小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥を遣りて、唐國に使せしむ。仍りて道奥蝦夷男女二人を以て唐天子に示す。」という記事が見える。ヴェントの記事はこのあたりのことをもとに誤解を含みつつ書かれたものであろう。なお、「皇室年代紀」というと、『群書類従』に鎌倉時代成立のものとみられるものが収められている「皇代記」や、『宋史』「日本伝」に東大寺の僧奝然が提出したとされる「王年代紀」、室町時代の洞院公賢が著した『皇代略』など、中世のダイジェスト版の歴史書を連想させるが、それらの史料に則天武后のパンダ贈与記事があるわけではない。『日本書紀』も天皇の歴代紀というかたちをとっているため、「皇室年代紀」と称されたのではなかろうか。

白雉の遣唐使の際に、唐の高宗（則天武后の夫）に対して蝦夷を見せたことは、唐に対して、日本もまた

さまざまな国を支配下に置く「帝国」であることを示すという意図があったとされる。[13] 阿倍比羅夫の粛慎征討もその延長線上にある、支配領域の拡大に伴う日本の「帝国化」を示す事件とも理解される。

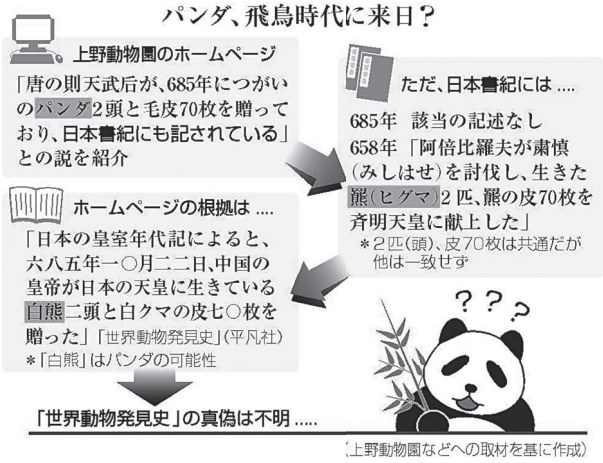
そう考えるならば、本来、中国（唐）への対抗的な意図を示す記事が、欧米の書物を介して誤解され、逆に、中国側の優越意識をにじませた日中の国交と贈り物の記事として理解されているということは面白い現象だと言えるだろう。

以上の内容をまとめて、時事通信社に伝えたところ、令和四年五月一日に「パンダ、飛鳥時代にも？ 「唐女帝が贈呈」説を追う―日本書紀には記述なし・来日50年」として配信され、各地の新聞に掲載された。[14]

おわりに―「日本紀に有り」

本稿ではさんまとパンダについて、取材に関連して『日本書紀』に関する簡単な調査を行った結果をまとめてみた。それぞれすでに個別に指摘された事実も多い。

興味深いのは、いずれも『日本書紀』にある、という主張が独り歩きして、「さんま寿司」や「中国のパンダ外交」というものを権威づけることになっている点である。日本中世においてはしばしば『日本書紀』の注釈から展



時事通信社配信記事に付された図

開して、「日本紀（＝日本書紀）に有り」という言葉が、故実・学説の根拠として用いられ、『日本書紀』にない記事すら創出されてきたことは「中世日本紀」という呼称とともに、今日広く知られており、近世・近代においても同様の営為が繰り返されたという指摘も近年ではなされている。[15]

これらの説に際して称される存在しない『日本書紀』の記事については、それになぞらえて「現代日本紀」とでも言うべきであろうか。

注

（1）岡野節子・堀田千津子「紀伊地域における〝さんまずし〟」『鈴鹿国際大学短期大学部紀要』二十一号（平成十三年）。

（2）『紀伊続風土記 第3輯　牟婁・物産・古文書・神社考定』（帝国地方行政会出版部、明治四十三年）、『日本歴史地名体系　和歌山県の地名』（平凡社、昭和五十八年）。

（3）産田神社内の解説パネルには以下のように書かれている。

「産田神社の神籬「ひもろぎ」　熊野市有田町産田神社の社殿の両側に直径一尺高さ五寸の丸石が並べられています。囲まれた中に五個が置かれ「ひもろぎ」跡と想像される場所があります。昔からここに落ちた枯葉など箒で掃くことなく手で取り去るようにきつく言い伝えられてきました。昭和三十五年の五月に考古学の権威の小野祖教「もとのり」国学院大学文学博士が熊野に来られ鑑定されました。その結果は約二千年前の崇神天皇「古事記や日本書記に記載」の時代の古代祭祀遺跡と判明しました。日本には東北地方に一ヶ所あるのみで、産田神社で二ヶ所目の発見であるとのことでした。この「ひもろぎ」は古代の社殿の無い時代に神をお迎えしてもてなす場所で神社の磐境（いわさかといい神の鎮座する区域）をしめすもので住民が永くたいせつに守ってきたのであろうとのことでした。この地域では津の森遺跡が発見され弥生時代初期の土器や石器やもみがらの付いた瓶など多数のものがみつかっています。人々が暮らし米作りが始まった頃、神にいろいろな事を願った古代祭祀遺跡がひもろぎであったのだろうと想像されます。」

（4）三重県神職会編『三重県下の特殊神事』（昭和十三年、三重県神職会）。

（5） https://www.ueno-panda.jp/about/

（6） https://www.tokyo-zoo.net/ROOT/express/express_back?record=138、R&D・モリス（根津真幸訳）『パンダ』（中央公論社、昭和五十一年）。

（7） 「唐の時代に日本がパンダをもらった、という誤報・誤訳について」（https://lovelovedog.hatenadiary.org/entry/20080517/panda）、
「日中パンダ交流史（？）の謎、ちょっとだけ試論」（https://syulan.hatenadiary.org/entry/20070523/p1）
北村豊「「パンダ貸与」の意味するもの」（日経ビジネスオンライン、現在は消滅）、同「「中国の夢」実現に成果を上げるパンダ外交」（日経ビジネスオンライン、https://business.nikkei.com/atcl/opinion/15/101059/071200109/?P=5）、
岡田敏一「パンダの絶滅危機ランクで見えた中国の皮算用」（産経ニュース、二〇二一年七月二十三日、https://www.sankei.com/article/20210723-LCGMNXADZ5LLBPF6PB3QMGUPBA/2/）
「中国の「パンダ外交」（北京週報日本語版、二〇〇九年十二月二十八日、http://japanese.beijingreview.com.cn/yzds/txt/2009-12/16/content_236967.htm）、
「パンダ外交」の始まりは則天武后…685年に日本につがい送った」（中央日報日本語版、二〇一六年三月八日、https://s.japanese.joins.com/JArticle/212812?sectcode=A00&servcode=A00）、

（8） 家永真幸『中国パンダ外交史』（令和四年、講談社）。同様の記述は同『パンダ外交』（平成二十三年、メディアファクトリー）にもある。

（9） ヘルベルト・ヴェント「地主李の白熊」同（小原秀雄・羽田節子・大羽更明訳）『世界動物発見史』（平凡社、昭和六三年、原著一九五六年刊行）。

（10） ヴェントは日本に関する史料を所持していたようだが、その理解には誤りも多い。「地主李の白熊」には「極東の芸術家はすでにレッサーパンダも知っていたのだろうか。この日本人の絵がそれを証明しているように思われる」として立ち上がる動物の絵が付されているが、平凡社の訳では「訳注―これはタヌキを描いたものである」とする。

（11） （6）及び（7）の一部で指摘がある。

（12） 小口雅史「渡嶋再考」『国立歴史民俗博物館研究報告』八十四号（平成十二年）。

（13） 石母田正『日本古代国家論　第一部』（昭和四十九年、岩波書店）。

（14）「パンダ、飛鳥時代にも？　「唐女帝が贈呈」説を追う―日本書紀には記述なし・来日50年」二〇二二年五月一日 https://www.jiji.com/jc/article?k=20220430003600&g=soc
「そのかわいらしさから、世代を超え愛されるジャイアントパンダ。今年は来日から半世紀の節目となるが、実は約１３００年前の飛鳥時代に中国の女帝から贈られたとの説もある。本当なのか。真相を追った。
パンダは１９７２年、国交正常化を機に中国から来日。現在、上野動物園（東京都台東区）など3施設で13頭が暮らし、仙台市などが誘致を続ける。
同園はホームページ（ＨＰ）でパンダの生態を紹介する中で、中国史上唯一の女帝だった唐の則天武后が「６８５年につがいのパンダ2頭と毛皮70枚を贈っており、日本書紀にも記されている」との説を披露。該当部分として、「是歳、越国守阿倍引田臣比羅夫、討粛慎、献生羆二、羆皮七十枚」を挙げる。
京都産業大の久禮旦雄准教授（日本古代史）によると、「６５８年、阿倍比羅夫が粛慎（北海道にいたと思われる、大和政権に従わない人々）を討伐し、生きたヒグマ２匹、ヒグマの皮70枚を斉明天皇に献上した」と解釈できるという。ただ、共通なのは「２匹（頭）」と「皮70枚」だけで、年も含め他は異なる。
上野動物園は謎を解く手掛かりとして、1冊の本を挙げる。１９５６年出版の外国書籍の邦訳「世界動物発見史」（平凡社）だ。ここに「日本の皇室年代記によると、六八五年一〇月二二日、中国の皇帝が日本の天皇に生きている白熊二頭と白クマの皮七〇枚を贈った」と記されている。
同書より後の「パンダ」（中央公論社）もこの説を紹介し、訳者は「皇室年代記」が日本書紀を示すと指摘。両書は、「白熊」が中国にいないホッキョクグマではなく、パンダを指す可能性があるとしている。
ただ「皇室年代記」の正体は分からず、上野動物園側も「『世界動物発見史』の真偽は不明」と指摘。久禮准教授は「日本書紀そのものではなく、同書の抜粋書のような書籍を基にしたため不正確な記述になったのでは」と推測する。
日本パンダ保護協会（東京都中央区）の土居利光会長は「飛鳥時代来日説を聞き、由来や生態を真剣に調べてもいいし、歴史やロマンを感じてもいい。わずかな記述から想像が膨らむのも人気者のパンダだからこそだ。一人ひとりが好きなように楽しんでくれれば」と話している。」
（15）神野志隆光『変奏される日本書紀』（平成二十一年、東京大学出版会）、斎藤英喜『読み替えられた日本書紀』（令和二年、角川選書）。

シンポジウム
平成と令和の大礼を振り返る

所功
楠本祐一
久禮旦雄